

平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

医療法人草加草仁会 草加病院 藤田仁

今回、スタンフォード大学海外研修に派遣していただき、大変感謝している。世界の第一線で活躍されているその道の第一人者の講義を聞けるということは、大変刺激的であり、私の人生にとって大きなプラスとなった。

私が今回、この研修の参加した目的は 3 つある。1 つ目は、世界の最先端の放射線診療を肌で感じたかったからである。2 つ目は、私の研究テーマである、CT による肺がんの早期発見方法について、何らかのサジェスチョンが得られたらしいなと思ったからである。3 つ目は、私のような年長者が参加することにより、研究意欲のある若い人が後に続いてくれれば良いとの思いがあったからである。1 つ目に関しては、主に CT, MRI, 核医学に関してだが、世界のトップレベルのドクターの講義を受け、またサイクロotron, 7T の MRI, 大学病院の放射線科、画像診断センター、3D ラボ、小動物用実験ラボセンター、がんセンター等を見学させていただき大変感動した。まず病院内に入って感じたことは、スタッフの数が多いことである。聞けばさまざまな職種の方が活躍されており、技師においても CT や MRI 等の専門技師に分かれ、CT 専門技師は MRI の撮像はしないそうだ。また、病院内の壁には、明るい色合いの絵や写真が配置よく飾られていて、大変癒された。待合室では、生演奏の音楽が定期的に流れ、癒しの空間が演出されていた。放射線科では、実際に患者を CT, MRI で撮っている現場を見せていただき、大変勉強になった。ただ、CT 操作室の入り口にドアが無いのが気になったが、米国の法律はそれ程厳しくないので、そこまでする必要がないとのことだった。画像診断センターでは、その設立理念が大変すばらしいものだった。最近の米国の医療のトレンドとなっている、「患者が一番」という考え方を取り入れ、待合部屋には家庭的な雰囲気が漂っていた。講義の方で一番感動したのは、分子イメージングの講義だった。「病気は分子レベルで始まる。病気の発生源を突き止めるためには、どうしても細胞レベルに戻らなければならない。体の中にスパイ(放射性核種)を送り、悪い細胞と結合して光らせ、病気の発生源を見つける」というものである。アルツハイマー病等は、症状が顕著になる 5 年前には診断できるという画期的なものである。将来的には診断だけでなく、治療にも応用したいということであり、その発展には大いに期待が持てるものだった。2 つ目の目的である、CT による肺がんの早期発見方法については、3D ラボの技師、がんセンターのドクターに直接質問をして聞きました。3D 画像は治療の場合のみ作成され、診断の場合は主に、MPR を作成するというものであり、われわれの行なっている方法と同じであり安心できるものだった。

今後の要望事項であるが、最先端の医療というと CT, MRI, 核医学が中心となるのは仕方ないと思うが、他のモダリティ(血管造影、マンモ等)における米国での診断・治療方法についても、少しは講義や見学等があっても良いのではと思った。いずれにしても今回の研修は、私にとって大変刺激的であり、大きな財産になった。世界的に有名な科学者の話が、
同時通訳でまとめて聞けるチャンスはめったにない。
最高のカンファレンスである。若い技師の方が後に続くよう願っている。

最後になりましたが、この研修を企画していただいた JSRT、研修を実施していただいた Dr. モズレーはじめスタンフォード大学の職員の皆さん、研修をバックアップしてくださった GE ヘルスケアのスタッフの皆様に感謝致します。大変ありがとうございました。



終了証書授与式にて Michael Moseley 教授(右)と筆者